

日本のテレビドラマにおけるジェンダーステレオタイプ表現 ー女性文末詞の使われ方に着目してー

柴尾 美亜

2000年代以降、社会情勢の変化を背景として、女性の話し言葉における女性独特の文末詞「わ」や「かしら」が、日常会話ではほとんど用いられなくなっていることが明らかになっている。一方、2005年に行われた調査では、テレビドラマでは未だに、女性文末詞が多用されるという形でのジェンダーステレオタイプ表現が残存していることが示された。しかし、その調査対象は年層や作品に限られたものであった。また、その後、すなわち2006年以降の長期的動向や直近の状況は明らかになっていない。

本研究は、日本のテレビメディアにおけるジェンダーステレオタイプ表現の長期的な推移と現状を明らかにすることを目的とし、2006年から2018年まで13年間のテレビドラマ計78本を対象に、女性文末詞の使用の実態を調査し、分析した。調査にあたっては、これまでの調査よりも、対象年層、作品ともに拡大し、より一般性を担保する内容とした。また、分析にあたっては、統計処理を加えて、数量分析をおこなった。その結果、次のことが明らかになった。

1. テレビドラマにおいて、登場人物が女性文末詞を多用するという形でのジェンダーステレオタイプ表現は、年を追って、減少しつつある。
2. 総女性文末詞数、文末詞使用者数（登場人物数）および1人あたり平均文末詞使用数の全ての項目において、40代以上のいわゆる中高年層が最も高い数値を示す。一方、年次と文末詞使用数の相関については、40代以上の年層が全年層の中で最も大きい負の相関係数を示すことから、中高年層におけるジェンダーステレオタイプ表現は他に比して急速に減少しつつあるといえる。したがって、40代以上の中高年層と20代～30代の年層との差が縮まりつつあるといえる。
3. 原作がある作品よりも、オリジナル脚本の作品の方が女性文末詞を多用する傾向にある一方、年次ごとの変化に伴う減少傾向は後者の方が強いことから、現代社会の状況が反映されやすいのはオリジナル脚本の作品であるといえる。

これらの知見は、先行研究の空白を埋め、長期的視点にたって、日本のテレビドラマにおけるジェンダーステレオタイプ表現の動向を、女性文末詞の使用という観点から明らかにした点で、テレビメディアにおけるジェンダー研究の進展に資するものと考えられる。今後、調査期間を延長し、対象作品を拡大することで、さらに大きな成果が期待される

(指導教員 辻泰明)